

# 高校生は「方言」をどう考えているのか

—高等学校での「方言」を題材にしたグループワークの実践—

岩城 裕之（高知大学教育学部）

## Practice of the group work class to think about a reason to leave a dialect

Hiroyuki Iwaki

(Faculty of Education, Kochi University)

### 要 約

首都圏に対する地方（地域）に生きる人々にとって、方言は生活言語である。したがって、方言の重要性を語る時、視点は自ずから使用者のものになる。方言の継承の目的や方言の意味を語る時、この視点はもちろん重要ではあるものの、例えば共通語を使って生活する人々から見たとき、方言は生活言語と言うよりも「対象としての一言語」である。したがって、方言継承の意義や方言の意味を発信していく際、この外部の目で自らの方言を見つめることが重要であると考えられる。本稿は、高校生を対象に、方言を残していくべきであるという主張を首都圏の高校生に行うというテーマで行ったグループワークの実際を報告するものである。

高知県西部の高等学校の協力を得て行った実践の結果、自らの方言を対象化することには一定程度成功することができた。また、グループワークという形式で実施したことが、生徒たちの意見交換につながり、方言を対象化する視点の共有を促す作用をもたらしたと考えられた。

キーワード：方言 対象化 グループワーク

### はじめに

平成21年にユネスコが発表した"Atlas of the world's Languages in Danger"の第3版で、日本ではアイヌ語、八重山語、与那国語、八丈語、奄美語、国頭語、宮古語の8言語が消滅の危機にあるとされた。また、東日本大震災の被災地においても、それまで進んでいた人口減のスピードが増したこと、福島第一原子力発電所の周辺地域などで住民が帰還できない地域があるなど、これらの地域の言語（方言）が消滅の危機にあるとされ、文化庁の事業として保存・継承の取り組みが行われている。

高知県の方言も、これらの言語に比べて過疎化のスピードは大きくはないものの、消滅の危機から遠いわけではない。

ところで、方言を残すことについて、現在の高校生はどのように考えているのであろうか。筆者は高知大学教育学部門研究プロジェクト経費「幼小中高大を貫く『課題解決力』を育成するグループワークコンテンツの開発」を得て、方言を残すことのメリットをテーマにしたグループワークを実施した。本稿は高知県西部にある県立高等学校（以下A高校とする）の協力を得て実施したグループワークの実際について報告、考察するものである。

## 1. 国語の授業での方言の扱い

現行の学習指導要領の国語科では、小学校、中学校それぞれに方言に関する記述がある。なお、該当部分を中心に引用し、下線は筆者による。

まず小学校については、「第5学年及び第6学年」である。

### A 話すこと・聞くこと

(1) 話すこと・聞くこと的能力を育てるため、次の事項について指導する。

- ア 考えたことや伝えたいことなどから話題を決め、収集した知識や情報を関係付けること。
- イ 目的や意図に応じて、事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら、場に応じた適切な言葉遣いで話すこと。
- ウ 共通語と方言との違いを理解し、また、必要に応じて共通語で話すこと。
- エ 話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめること。
- オ 互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合うこと。

－以下、略－

中学校では、中学校2年生の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に方言に関する記述がある。

(1) 「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

#### ア 伝統的な言語文化に関する事項

- (ア) 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと。
- (イ) 古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。

#### イ 言葉の特徴やきまりに関する事項

- (ア) 話し言葉と書き言葉との違い、共通語と方言の果たす役割、敬語の働きなどについて理解すること。
- (イ) 抽象的な概念を表す語句、類義語と対義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句などについて理解し、語感を磨き語彙を豊かにすること。
- (ウ) 文の中の文の成分の順序や照応、文の構成などについて考えること。
- (エ) 単語の活用について理解し、助詞や助動詞などの働きに注意すること。
- (オ) 相手や目的に応じて、話や文章の形態や展開に違いがあることを理解すること。

#### ウ 漢字に関する事項

－以下、略－

小学校では共通語との使い分けという実際の言語運用を、中学校では2つの役割の理解という概念的な内容へと深化していると考えられる。

中学校2年生での「共通語と方言の果たす役割」は、例えば高知の生徒であれば、いわゆる土佐弁と共通語の果たす役割を考えることになる。この場合の視点は、高知に生きる住民としての視点である。一方で、自分たちは共通語を話していると考えている首都圏の生徒の場合、方言はおそらく知識の中にある、現実運用することの少ないイメージとしての方言、抽象的な言語といっても良いものであろう。あくまでも、生徒が今いる場所、そこでの言語を中心に考えることになると思われる。

つまり、よく聞かれる方言イメージに、「方言の温かさ」「日常語としての使いやすさや気安さ」などがあるが、これは方言社会に生きる人々にとって意味を持つイメージである。共通語を話す生徒がこれらの方言イメージを語ったとしても、それは質的に異なるものであると考えられる。

今回、高等学校向けのテーマを考えるにあたり、メタのレベルで方言を捉えることとした。そこで、自らの方言の位置づけを外部の人、とりわけ共通語話者にプレゼンテーションするという課題を設定した。方言社会に生きる生徒に、共通語を話す生徒が描くであろう、方言に対するイメージとのずれを認識させ、その上でどのような「方言の意味」を描くのかということを目指そうと考えたためである。

方言を継承するというとりくみを当該地域の住民が中心となっていくことに意味はあるが、一方で方言継承の意味を外部に発信する際には、そのとりくみが外部の人にとってどう捉えられるのかという視点を持つことが必要である。この視点を意識するという試みでもある。

## 2. グループワークのテーマについて

グループワークのテーマを以下のように設定した。

グループワーク お題

あなたは、方言を残す必要性について、首都圏の高校生にプレゼンテーションすることになりました。

そこで、

- 1 方言を残すべきだという主張を、わかりやすく、その理由も含めてプレゼンする資料を作ってください。
- 2 さらに、次に示した全国の方言（参考までに「坊ちゃん」の冒頭部分の方言訳したものをつけています）を残すべきだと思うものを3つ選び、紹介してください。なお、理由も必ず明示してください。
- 3 1と2を模造紙一枚にまとめたプレゼン資料を作成してください。

前提条件として、方言社会ではない地域としての首都圏を設定した。厳密には首都圏にも方言はあるが、生徒たちにとってイメージしやすいことを優先した。

その上で、方言を残すべき理由を考えさせ、さらに、例示した地域方言のうちどれを優先的に残すのかという課題を提示した。2つめの課題は、方言を残すべき理由に即して全国の方言をみた場合にどれを選択するのかということで、1つめの課題の確認の意味もある。

いずれも、自分たちの地域方言を外部の目で捉え直すという課題である。

なお、同じテーマを個人作業の小論文で扱うこともできるが、グループワークという他者との協同作業の中で様々な視点が生まれることを期待して、グループワークのプログラムとして実施した。

参考までに、2つめの課題で取り上げた方言は、平井昌夫・徳川宗賢編『方言研究のすべて』（1969年 至文堂）に掲載されている、小説『坊ちゃん』の冒頭部分の方言訳を利用した。地点は次のとおりである。

青森県（弘前市） 山形県（東根市） 群馬県 富山県（福光町） 京都府（京都市） 大阪府（和泉地方） 福岡県（前原町） 鹿児島県（鹿児島市） 沖縄県（糸満）

## 3. 生徒たちの方言イメージ

グループワークに先立って、生徒たちの方言イメージを知るためにアンケートを行った。グループワークの受講は希望者を対象にしたため、参加者は9名である。結果は以下の通りであった。

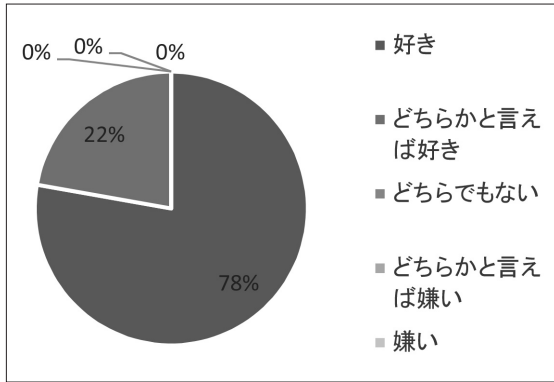


図1 自分の地域の方言が好きか嫌いか

まず、自分たちの地域の方言が好きかどうかを尋ねた。質問文は「あなたは、自分の地域の方言（幡多方言など）が好きですか？」である。これに対して、嫌いであるという回答は全くみられなかった。すべての生徒が、「好き」または「どちらかと言えば好き」と回答し、その中でも「好き」という回答が多数を占める。方言に対するイメージは良いことがわかる。

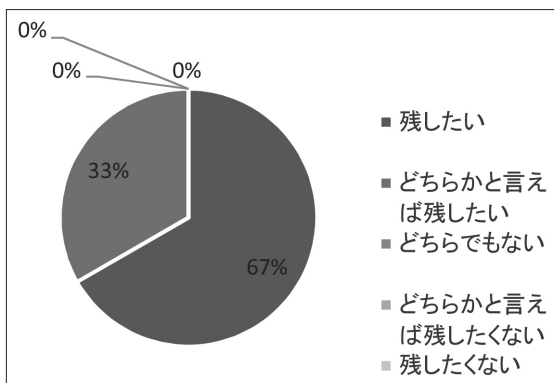


図2 自分の地域の方言を残したいか

次に、そのような方言を残したいと思っているかどうかを尋ねた。質問文は「あなたは、自分の地域の方言を将来に残したいと思いますか？」である。

すべての生徒が「残したい」「どちらかといえば残したい」という回答であった。それも、積極的に「残したい」とする回答のほうが、「どちらかといえば残したい」を上回っており、方言が好きであることと関連して、自らの方言に良い印象を持っていることがわかる。

このように、A高校の生徒達の方言イメージは悪くない。

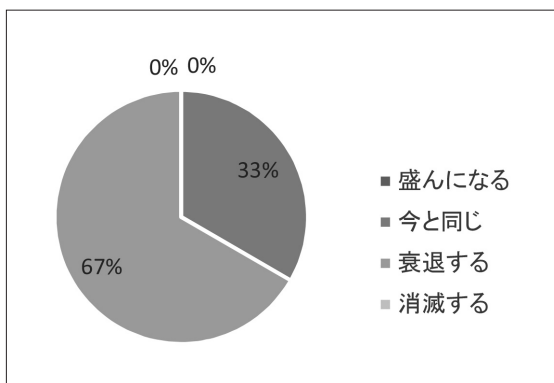


図3 方言の将来

では、今後、自分たちの方言がどうなると考えているのであろうか。質問文は「自分の地域の方言は、将来どうなると思いますか？」である。

その結果、「今と同じ」が33%、「今よりも衰退する」「消滅する」という回答は見られなかった。今と同じであるとする生徒も3割ほど見られるが、どちらかといえば、自分たちの方言は衰退する方向にあると生徒達は認識しているようである。

つまり、自分たちの方言は好きで、残したいと思っているものの、現実には自分たちの方言は失われていく方向に向かっているというのが、A高校の生徒達の方言に対する認識であるとまとめることができよう。

さらに、生徒達はそのような方言をどのようなイメージで捉えているのであろうか。評価語となるキーワードをいくつか挙げ、当てはまるものを選んでもらった。質問文は「下のキーワードのうち、自分の方言に当てはまると思うものを○で囲んでください。いくつでもかまいません」である。

提示したキーワードは「素朴だ」「穏やかだ」「重苦しい」「都会的だ」「正しい」「丁寧だ」「やほったい」「きれいだ」「カッコいい」「聞き取りにくい」「田舎くさい」「親しみやすい」「きつい」「指摘だ」「地味」「荒っぽい」「味がある」である。

結果を示す。まず、「素朴だ」「親しみやすい」を選んだ生徒が最も多く（各5名）、続いて「表現が豊かだ」「荒っぽい」であった（各3名）。「荒っぽい」以外は肯定的な評価語が並んでいる。また、表現の豊かさや親しみやすさといった、方言の使用者としての評価が多いことも特徴である。このほか、「穏やかだ」「味がある」（各2名）、「田舎くさい」「きつい」（各1名）が選択され、その他のキーワードを選択した者はいなかった。少数ながら、マイナス評価の語が選択されているが、先のアンケートの結果では方言に対する評価は悪くないため、「田舎くさい」と思っているとしても好きである、という状況にあると理解できる。

#### 4. グループワークの実際

グループワークは希望者が参加して行った。9名の参加者があり、学年は2年生、3年生の生徒である。グループは3つに分け、それぞれ3名である。

流れは次の通りである。まず、お題を提示し、90分間で話し合いをし、模造紙一枚でプレゼン資料を作成する。最後にそれをお互いに見て、感想を述べるというものである。

本実践はグループワーク形式での出前授業の2回目であったため、生徒達は時間配分にも慣れ、十分話し合った後で模造紙資料の作成に取りかかることができた。

以下、各グループの話し合いの流れを整理する。なお、時間展開に応じて箇条書きにしたが、観察者の主観によるものであり、箇条書きの個数の多少に大きな意味はない。

##### グループA

- ①方言を残すべき理由として、「暖かみがある」「感情が伝わりやすい」といった意見が出される。
- ②自分が方言を使わない立場であれば、方言を残そうとは思わないのではないかという意見が出され、首都圏の人にとって、地方が過疎化しようとも、伝統がなくなっても、何も影響はないと思われているのではないかという意見で話し合いが進む。
- ③地方がなくなることで首都圏の人が困る事例を探することで、地方を支える方言の必要性を訴えてはどうかという意見が出される。
- ④方言は地域の結びつきを強めるもの。それがなくなることで、地方が衰退し、過疎化が進むことによって「都市の食事を支えられなくなる」「旅行先としての田舎がなくなる」「帰省先がなくなる」といった弊害があることを結論とし、方言の重要性を説くことになった。

##### グループB

- ①方言の良いところとして「地域の一体感」「安心感」「地域の個性が出る」「話題が生まれる」などの意見が出される。
- ②首都圏を東京と考え、東京にもし方言があったら、というテーマで意見を出し合う。同じように、「地域にまとまりができる」「仲間意識や一体感」という意見が出る一方、標準語は冷たい感じがするという意見でまとまる。
- ③しかし、実際には東京に方言はないことから、どういう場合に方言があることが役立つのかという視点が提示され、話し合いが始まる。
- ④たとえば災害が起こった時、それが地方であれば住民のまとまりにつながり、もし東京で起こった場合は各地から救助の人が集まり、それらの人が方言を使っている場合、都市部の人は温かみ

を感じるのではないかという意見でまとまる。

- ⑤「地域」という感覚がない分、「地方」で感じられる安心感やまとまりがないので、災害時には方言がある方が良いという主張を行うことでまとまった。

## グループC

- ①首都圏の高校生にプレゼンテーションをするということで、もしも方言がなく標準語だけになったらどうなるかを切り口に話し合いが行われる。
- ②メリット、デメリットを考え、それぞれに意見が出される。メリットとして「全国どこでも意思疎通がしやすい」「対等に話せる」ことが挙げられた。反対にデメリットとして「言葉の温かみがない」「地域の特色が薄れる」「他人行儀になる」ことが挙げられた。
- ③標準語だけしかなかったらこれらのデメリットが生まれてしまうことをプレゼンすることでまとまる。「方言には温かみがある」ことを中心の主張とし、温かみが失われないために方言の必要性を主張することでまとまった。

グループによって話し合いの内容や結論は異なっているのは当然であるが、首都圏の高校生にプレゼンするという意味付けは、いずれのグループにも理解されていた。特にグループAでは、方言がなくなることが首都圏の人々にとってもデメリットであることを、グループBでは災害時という特殊な状況を考え、同じように首都圏の人々にとっての方言の有用性を説こうとしていた。地域で方言を使う側にある自らの立場を離れ、方言を対象化して考えることに成功しているとみられる。一方でグループCは、方言の対象化に同じレベルで成功している訳ではなかった。しかし、最後に他のグループの結果を見ることで、もう一步の深化の可能性を共有できたものと考えられる。

なお、どの地域の方言を残すべきかという課題は、当初の狙いを必ずしも満たすものではなかった。具体的には、グループAは山形県、京都府、沖縄県、グループBでは青森県、富山県、沖縄県、グループCは京都府、福岡県、沖縄県を挙げたが、沖縄県の方言は特殊であることが理由であり、京都府は古都であることが理由として挙げられた。そのほかの東北の方言も、標準語とは異なる特徴があることが理由として示されるなど、方言をなぜ残すのかという議論とは必ずしもかみ合ったものではなかった。

この問いについては狙いがわかりにくかったことから、課題として難しかったものと思われる。この点については今後修正が必要であると考えられた。

## おわりに

地域に生きる生徒たちにとって、方言は自らの生活言語である。それを「継承する」といった時、あるいは方言の重要性を語るとき、もちろん生活言語としてその言語を使う人の目が最も重要である。その一方、生活言語を外の目で捉え、その意味を考えることも、方言の継承や良さを外部に対する発信という点では必要な視点である。本取り組みは、生活言語を外の目で見つめるという取り組みであった。

グループワークの中で、ある生徒が「私たちが方言は温かいと言っても、首都圏の高校生は私たちと同じように標準語を温かいと思っているのではないか」という発言をし、「だから、方言は温かいと言っても伝わらないのではないか」と続けた。この視点を持つことが本グループワークの狙いであった。個別の小論文ではなく、様々な意見が飛び交うグループワークであればこの発言が共有され、さらに触発されて新たな意見が出てくる可能性がある。新たな視点を獲得することを狙ったコンテンツの場合、グループワークが効果的であるように考えるのである。

本実践は、高知大学教育学部門研究プロジェクト「幼小中高大を貫く『課題解決力』を育成するグループワークコンテンツの開発」の補助を得て行った実践である。

#### 参考文献

井上史雄 1980「方言イメージの評価語」『東京外国語大学論集 30』

